

第65回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム 4

小児領域における家族支援看護

基礎教育における家族看護教育の現状

田久保 由美子 (東京保健医療大学千葉看護学部)

I. はじめに

世界に類をみない少子超高齢社会を迎え、膨大化する医療費対策として在院日数の短縮化、医療依存度の高い状況での在宅療養が推進されている。一方で、ひとり親世帯やステップファミリー、日本で暮らす外国人家族の増加など、家族構造も多様化し、児童虐待や高齢者虐待の増加など、家族機能の低下も言われている。このような医療・生活を取り巻く変化により、多彩な背景を持つ家族全体を視野に含めた看護が必要とされ、基礎教育で求められる家族看護の実践能力も高くなっている。

II. 基礎教育で求められる家族看護の実践能力

平成30年6月に日本看護系大学協議会より発刊され

た『看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標』では、「看護の対象となる人々(個人・家族・集団・地域)との信頼関係の形成に必要なコミュニケーションを展開できる」、「家族の生活を把握し、家族員の健康状態との関連をアセスメントできる」、「妊娠・出産・育児期の母児(子)とその家族の健康を保持増進するために必要な看護援助方法を指導のもとに実施できる」等が卒業時の到達目標として挙げられている(表1)。また、平成29年10月に文部科学省で策定された『看護学教育モデル・コア・カリキュラム』では、「個人と家族の発達課題を理解できる」、「家族のセルフケア機能を理解できる」、「家族をシステムとして理解し家族介入の基本を理解できる」等が学修目標として挙げられており(表2)、基礎教育において初めて家族をシステムとして理解することが明文化

表1 基礎教育で求められる家族看護の実践能力
看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標 (抜粋)
(平成30年6月 一般社団法人日本看護系大学協議会)

コアコンピテンシー	到達目標
ヒューマンケアの基本に関する実践能力	<ul style="list-style-type: none"> 看護の対象となる人々(個人・家族・集団・地域)との信頼関係の形成に必要なコミュニケーションを展開できる 看護の対象となる人々との協働的な関係の形成を理解、説明できる
根拠に基づき看護を計画的に実践する能力	<ul style="list-style-type: none"> 家族の生活を把握し、家族員の健康状態との関連をアセスメントできる
特定の健康問題に対応する実践能力	<ul style="list-style-type: none"> 妊娠・出産・育児期の母児(子)とその家族の健康を保持増進するために必要な看護援助方法を指導のもとに実施できる 心理的危機状況にある患者・家族のアセスメントと看護援助方法について説明できる 看取りをする家族の援助について理解できる 地域で生活しながら療養する人とその家族の健康状態や特性について理解し、在宅療養の環境を踏まえてアセスメントできる 療養する人と家族の健康問題を考慮し、その意思を尊重しながら、基本的な看護援助方法を指導のもとで実施できる

表2 看護学教育モデル・コア・カリキュラム (抜粋)
 ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の
 修得を目指した学修目標～

(平成29年10月 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会)

C 看護の対象理解に必要な基本的知識

C-2 生活者としての人間理解

C-2-2) 個人と家族

学修目標：

- ①個人と家族の発達課題を理解できる
- ②夫婦関係が形成される過程について理解できる
- ③子どもが生まれ、家族が形成される過程を理解できる
- ④家族のそれぞれの構成員が家庭生活を営む上でどのように機能しているかを理解できる
- ⑤子どもを産み育てる家族の機能を理解できる
- ⑥家族のセルフケア機能を理解できる
- ⑦家族の社会化機能を理解できる
- ⑧経済的側面が家族に与える影響を理解できる
- ⑨家族をシステムとして理解し家族介入の基本を理解できる

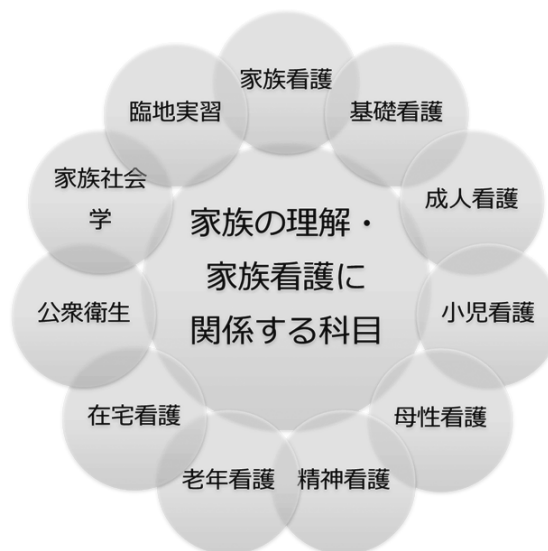


図 家族の理解・家族看護に関する科目

された。これらをまとめると、基礎教育で必要となる家族看護の内容は、座学を中心としたものでは、看護の対象としての家族を理解するための家族発達段階や発達課題、家族機能、家族システム（理論）、さまざまな状況にある家族の理解やアセスメントに必要な知識。演習や実習を中心としたものでは、さまざまな状況にある家族のアセスメントと、家族と看護的な視点でのコミュニケーションがとれることと考えられる。

Ⅲ. 家族看護学教育の現状

基礎教育で求められる家族看護の実践能力を修得するには、4年間でどのように学修を積み上げていけばよいのであろうか。家族の理解・家族看護に関する科目としては、基礎看護学・成人看護学・小児看護学・在宅看護学等の看護専門科目のほとんどが当てはまり、今や家族が看護の対象であることは、どの領域においても当然のこととなっている（図）。しかし、小児看護学では、家族の中でも特に養育者である母親に焦点が当たっていたり、老年看護学や在宅看護学では、介護者の意味合いが強いといった特徴がある。各領域に特徴的な内容や、さまざまな状況下にある家族の看護については学修ができるが、家族看護の概論、家族看護に関する理論やモデル等を、どこでどのように教えていくかは明確にはなっていない。

家族看護を系統的に学べる科目としては、「家族看護学」や「家族看護論」などがあるが、これは看護師の指定規則上、未だ必須の科目とはなっていない。そ

こで、家族看護学教育の現状について明らかにするため、平成28年度の看護系大学254校の大学ホームページに公開されている「家族看護学」等の家族看護に特化した科目のカリキュラム、およびシラバスによる調査を行った。結果、ホームページ上でデータ収集のできた大学の約6割に家族看護に特化した科目が設置されており、必須科目となっているのはその6割程度であった。また、授業回数としては、8回が最も多く、学習している学生数および講義時間ともに十分であるとは言い難い状況であった。教育内容としては、家族や家族看護についての概論的内容、家族発達理論や家族システム理論、家族アセスメントについては、科目のあるほとんどの大学で教授されており、前述した座学で必要とされる基礎教育内容の多くは含まれている。しかし、学内の教育者の不足や、オムニバス形式なども多くあり、教育の一貫性や継続性、各領域別教育内容との違いなどの課題が考えられた。また、日本家族看護学会が実施した看護基礎教育における家族看護学教育の実態に関する調査では、専門学校において家族看護学教育を目的とした特定科目を設置しているのは7%であり、他の科目に含めての教育が56%、特定の科目なしが37%であったことが報告されている¹⁾。このように大学教育とは開きがあり、看護師養成教育全体で見ると更に手薄いことがうかがえる。

Ⅳ. 小児看護学領域における家族看護教育の現状と展望

必須科目である小児看護学では、どのような家族看

護に関する教育がされているのか、可能なのかについて述べる。

小児看護の対象は、主に乳児期から思春期までとなるため、家族員が増え、独立するまでの家族の発達段階や、各段階における発達課題・家族機能について学ぶことができる。また、病や障害が家族に与える影響、急性期や慢性期、終末期等のさまざまな状況にある小児の家族への看護はどの教育機関でも教授されている内容である。更に、特記すべきは、実習において家族と関わる機会が多いことである。家族看護学科目の担当者としては在宅・公衆衛生看護領域が多いが、同行訪問が短時間や単発の経験になるのに対し、小児看護学の実習では、短期間であっても継続的に関わるため、家族とのコミュニケーションを体験したり、家族から直接得た情報をもとにアセスメントを行い、看護実践につなげる機会を得ることが可能である。更に、実習期間だけでなく、実習での経験をどのように発展させていくかで、学生の家族看護に対する学びは深まり、広がっていくと考えられる。実際、小児看護学実習で受け持った事例を深めたいと卒業研究に取り組む学生も多い。例を挙げると、思いもよらず母親に掛けられた「学生さんに受け持ってもらってよかった」との言葉から、学生でもできる家族看護があるのではないかと自分が行った看護を意味づけたケース、面会が少ない両親、子どものレベルに合っていない学習を勧める母親の様子など、実習中に気にかかっていた家族の行動や言動を取っかかりに、どのような看護が必要かを深めたケースなどがあった。実習での受け持ち事例の場合、家族アセスメントのツールであるジェノグ

ラム（家系図）と家族間や周囲との関係性を図示したエコマップ（環境図）をともに丁寧に描くことで、家族背景、家族の関係性や家族の歴史などの理解が深まる。実際「自分の知りたかったことがわかった」、「必要な家族の情報が全然取れてなかった」、「戸惑っていたのは家族ではなく自分だった」など学生の学びも大きい。また、家族看護学を学び、領域別実習を終えた学生へのインタビューからも、ジェノグラムとエコマップは全ての領域で役に立ったとの発言がみられている。

このように家族と関わる機会を得やすい小児看護学領域の強みを活かし、小児看護学の枠組みを超えて、家族看護学の生きた教材として活用していくことで、家族看護の実践能力向上に寄与することができるのではないかと考える。

V. おわりに

基礎教育における家族看護の教育は、看護師となり、家族を含めた看護実践を行ううえで基礎となるものである。社会の変化に呼応しつつ、臨床側のニーズも把握しつつ、基礎教育でどのように家族看護教育を進めていくか、必要とされる能力をどのように底上げしていくかが重要であり課題である。

文 献

- 1) 浅野みどり, 荒木暁子, 荻野 雅, 他. 看護基礎教育における家族看護学教育の実態に関する調査（追跡調査）2014. 家族看護学研究 2016; 22: 48-59.